

テーマの設定をめぐる

黒住真

表題の一文を記すことを学会事務局より求められた。私はテーマの企画者ではないがコーディネータとしてディスカッションに加わったので、そうした立場から、本テーマや発表者への期待をのべたい。当日おこなわれた発表とディスカッションの内容は、ここで論ずることはできないので、それについては、その後三氏が新たに書き下した本誌掲載三論文そのほかに発展的に吸収され、参加者各位共有の問題となることを望みたい。

徂徠論は、戦後の日本思想史研究のうち最も活発におこなわれた分野のひとつである。戦後何十年かの間、さまざまに引照されて思想史研究のたき台となったのは、丸山真男氏の『日本政治思想史研究』であったが、その丸山思想史は、荻生徂徠を根本的な鍵にしていた。だから、徂徠を問うことは、近世日本思想史の構想そのものを問うことと不可分ですらあった。徂徠への位置を決めないかぎり、思想史の構図を積極的に描いたといえないとも考えられたのである。

このような丸山思想史Ⅱ徂徠中心史観が妥当かどうかは、問題に

すべきだし、また対案としての思想史像も、いくつか対置されてきたと思う。たとえば、第二部のテーマとなる「民衆」思想史は欠かせないもののひとつだろう。「民衆」概念には、社会史・民俗学・宗教学から政治運動史までさまざまな視角の対象がむすびつくが、いまはこの語で簡単に一括しておく。

だがそれにしても、どうして丸山思想史Ⅱ徂徠中心史観は、人びとの物議の焦点になったのだろうか。それは、この史観が、戦後日本人が自分たちの実存的なテーマだと考えた「主体性」という問題にまさに正面からふれていたからである。丸山思想史は、ある盤石の体制が、もと体制的ではあるが革命的なモメントを孕んで生まれ出た新しい絶対的な人格によって崩されていくドラマである。そうしたドラマを担う「主体」が徂徠の思想から抽出されている。丸山氏の定位においても、また徂徠自身においても、その主体像は、決して一筋縄では押さえられない両義的な複雑さを抱えており、評価は簡単ではない。しかしともかく、この主体概念への着目によって、古い近世日本が、戦後の生きた時代精神に呼応するものとして現われ、それゆえ、それは作者丸山氏の手をも離れて熱い神話となつて

学者の関心を支配し、さまざまな問いを醸し出したのである。

丸山思想史は、昭和思想史に位置づけるならば、戦後誕生した「主体性論」のすぐれた一形態である。そして、丸山氏以降の、研究者たちが徂徠の核心テーマとしたものも、やはりその主体性問題にあつたと思う。戦後思想史の課題であるこの問題は、一九七〇年以後の戦後体制の変容と団塊の世代の成人化とともに、再び問い直しの組上りのぼる。かつて近代化や革命をめぐる構想された「主体性論」が再び呼び起こされあらたな形で決算することが求められたのである。ここからやがて思想史研究の世界において、八〇年代にかけての徂徠研究の活性化が起こってくる。

こうして起こった七、八〇年代の「新徂徠研究」にはたくさんの研究者が参加し、多くの重要な研究が蓄積された。その新徂徠研究に含まれたものをいふ十分に与えることは不可能だが、発表者である三氏は、そこに流れるモチーフをある程度代表する論者だといえる。三氏は、徂徠のメインテーマである主体性問題に対して、それぞれきわめて鮮明な輪郭で解答を提出した。

平石直昭氏は、『荻生徂徠年譜考』（平凡社、一九八四年）の史実証、「戦中・戦後徂徠論批判——初期丸山・吉川両学説の検討を中心」（『東大・社会科学研究所三九一、一九八九年八月』）の研究批判・徂徠解釈をふまえて、「徂徠学の再構成」（『思想七六六、一九八八年四月』）で、氏の徂徠の思想的全体像を示した。八九年論文で、平石氏は、丸山徂徠論では、その第一のテーマが、道徳からの政治意識の独立を扱っているが、その「政治的思惟の優位」「公私の分裂」分析が不十分であるという。また丸山氏の第二テーマである作為論も、徂徠の

学問方法論と結合されずに不徹底になっている。そのため丸山氏は、徂徠の描かんとする主体性——われわれとして近代性として認めるべきものを十分とらえていないと指摘する。その徂徠の主体性、近代性の構造をとらえたのが八八年論文である。そこで氏は、徂徠には、自然と人為を混淆する神話的呪術的意識をのりこえ、自然を対象化し仮構的な人為を定立する批判的な認識主体の論理があるとす。 (なお、氏の八七年論文には、ほかにも、八八年論文に吸収されない創見がいくつかあるが、行論上いまは措く。)

本郷隆盛氏は、従来から近世思想研究論における言及のかたちで種々徂徠に閑説してきたが、「荻生徂徠の公私観と政治思想」（『日本思想史学三二、一九九〇年』）に至って、徂徠の全体像を提出した。この九〇年論文は、政治思想としての徂徠の把握を掲げる。氏は、徂徠の「公・私」観は、全体—個人（社会対個人）といったいわば近代社会モデルの概念ではなく、レベルによっては例えば家などの共同体をも「私」としてみるような領域的概念だとする。この点では、本郷氏は平石八七年論文の丸山批判と合流する。しかしさらに、氏は、徂徠の「公」は幕法、「私」は国治を意味し、「公」が「私」に優先し「私」を従属させているのだと指摘する。また政治的主体論においても、徂徠は、人間の特殊性・限定性を把握するかぎりにおいて、リゴリズムからある程度の解放と寛容の態度をもたらししたが、結局のところ、浮び上がらせたいものは、役割の全体社会と治者像（聖人）にすぎず、元来の朱子学がもっていた理想主義を足なえさせてしまっているという。また徂徠の政治制度論は、形式的には封建論でも、実質的には、幕府における郡県、国治における封

建のセットであり、むしろ全体として郡県に吸収する構造のものだとする。

本郷氏は政治的な構造機能の側面から、平石氏は認識論・方法論の側面から、徂徠を語る。ふたつの立論は、平行して交わらずに両立する面もある。しかし核心となる「徂徠的主体性」については、本郷氏の方は、全体主義者・集中主義者の徂徠像を提出し、徂徠の主体性は為政者に偏重したものだとして辛くこれを評価する。これに対して平石氏の方は、批判主義者としての徂徠像を提出してその思惟方法に意義をみるので、徂徠に進歩的評価を与える。この評価の両極は、さまざまな徂徠論者を二派に分ける極でもあろう。一般に「主体性」を論ずる場合、意志や自我の積極性にそのメルクマーをみる主意主義の立場と、反省的対象的な自我・自己意識の成立にそれをみる批判主義の立場がありうるが、だとすると本郷氏は前者、平石氏は後者である。(一般に、これまで歴史家は前者、哲学者は後者に傾きがちであった。)

緒形康氏は、もともとの専攻は中国哲学・中国思想史だが、近世儒教・日本思想史研究にも造詣が深い俊英である。最近「鎖国システムと近世権力」(日本文学四〇、一九九一年一〇月)、子安宣邦『事件』としての徂徠学』批評などをはじめとして、日本近世論を全面展開している。氏の徂徠論で最も印象的なものは、「荻生徂徠の言語論——『説荀子』から『弁名』へ」(寺小屋語学文化研究所論叢二、一九八三年)であろう。この八三年論文で氏は、言語意識の成立の側面から、中期徂徠からいわゆる徂徠学が形成される過程をとらえた。これは、近年さかんにおこなわれている、言語論・言説論として徂

徠を読み抜こうとする動向の先がけでもあった。平石・本郷氏より世代的に一回り若い緒形氏のタイプの言説論的研究は、今後もっとふえるものと思われる。

言説分析の手法は、思想的には、西欧中心主義が相対化され近代的な主体への確信がゆらぎはじめたところに出てきた。ここでの問題意識は、「イデーからベルゾーンへ」(丸山『日本政治思想史研究』第二章第三節)ではなく、むしろ「ベルゾーンからシステムへ」である。つまり主体を実体化するのではなく、主体をつつむ媒体としての言語や生活の様式に関心を注ぐ。現代思想における言語への関心、制度論や構造論・流通論の勃興、歴史学での社会的視角の台頭などは、この流れに棹さしている。徂徠研究においても、こうした手法が、新しい知見をもたらしてくれることは疑いがない。が、問題は、言説や生の様式に注目する徂徠論が、はたして「新しい主体性の地平を開く」取り組みなのか、それとも文字どおり「魂を失った」営みとなるのかである。この問題は、また徂徠自身がかかえている危うい問題点でもある。

主体論と言語論を架橋するものは、徂徠においては学問論である。だから問題の真の決着はそこに掛かっている。徂徠学問論については、ここでは取上げられなかった。今後、三氏を始めとする研究者の方々への提論や徂徠のテキストをさらに検討していくことを期したいと思う。「一九九二・八記」

(東京理科大学助教授)